

研究ノート

栗林式土器研究の一視点 一松原遺跡の整理作業から一

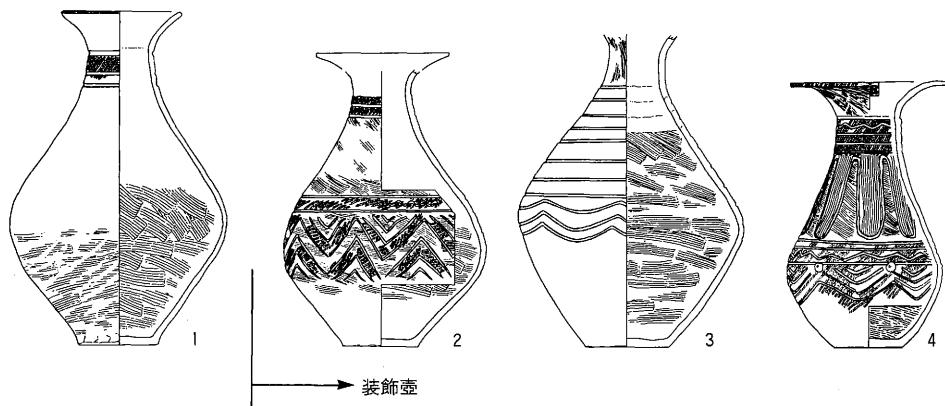
上田 典男

- | | |
|---------------|-----------------------|
| I. はじめに | III. 正面觀を表現した裝飾壺の存在意義 |
| II. 裝飾壺の分類と文様 | IV. おわりに |

I はじめに

長野市松原遺跡では、弥生時代中期後半栗林式期の竪穴住居址が240軒を越える規模で確認されている。遺構数も膨大なら、それらに帰属する遺物量もまた膨大である。ようやく本年度から整理作業が本格化し、その内容が徐々に明らかになりつつあるところである。土器の接合作業も全体量からすれば僅かであるが、完形に近い形で復元された壺形土器の個体数は67個体となっている。既存の資料と対比しても、本遺跡出土土器の完形率の高さが指摘されよう。

これらを観察すると、先学の指摘通り、文様が施文される部位によって、頸部のみに文様が施文される一群、頸部から胴部まで文様が施文される一群、頸部と胴部に文様が施文される一群の三者に分類が可能である。これら三者は、一つの遺構から出土することが多く、時間的先后関係を有するというよりは、むしろ土器組成と捉えられ、それぞれが変遷過程を保持していることが、整理作業の過程から見通せるようになってきた。同時に、施文される文様及び文様構成という点でも、幾つかの特徴が導き出されている。ここでは、胴部にまで施文が及ぶ、先の分類で言えば後二者を「装飾壺」と便宜的に称し（第1図）、これら土器群の文様構成について、考えを述べてみたい。

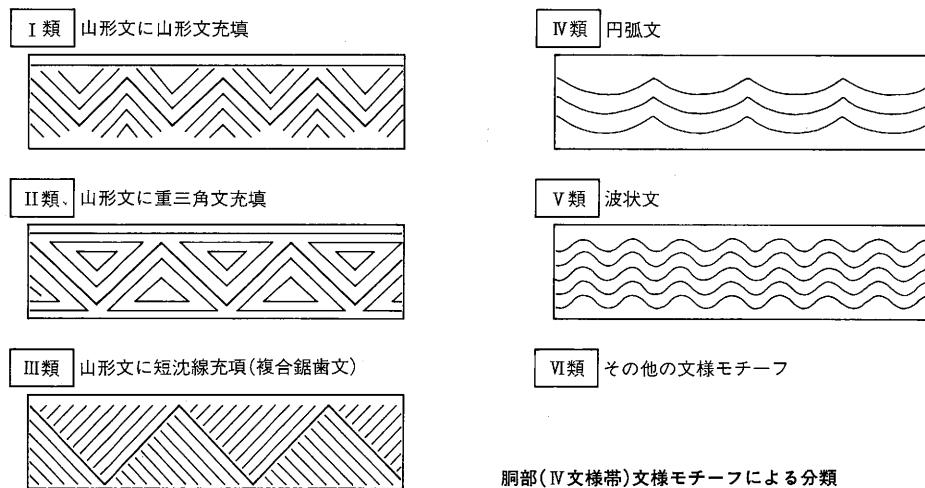
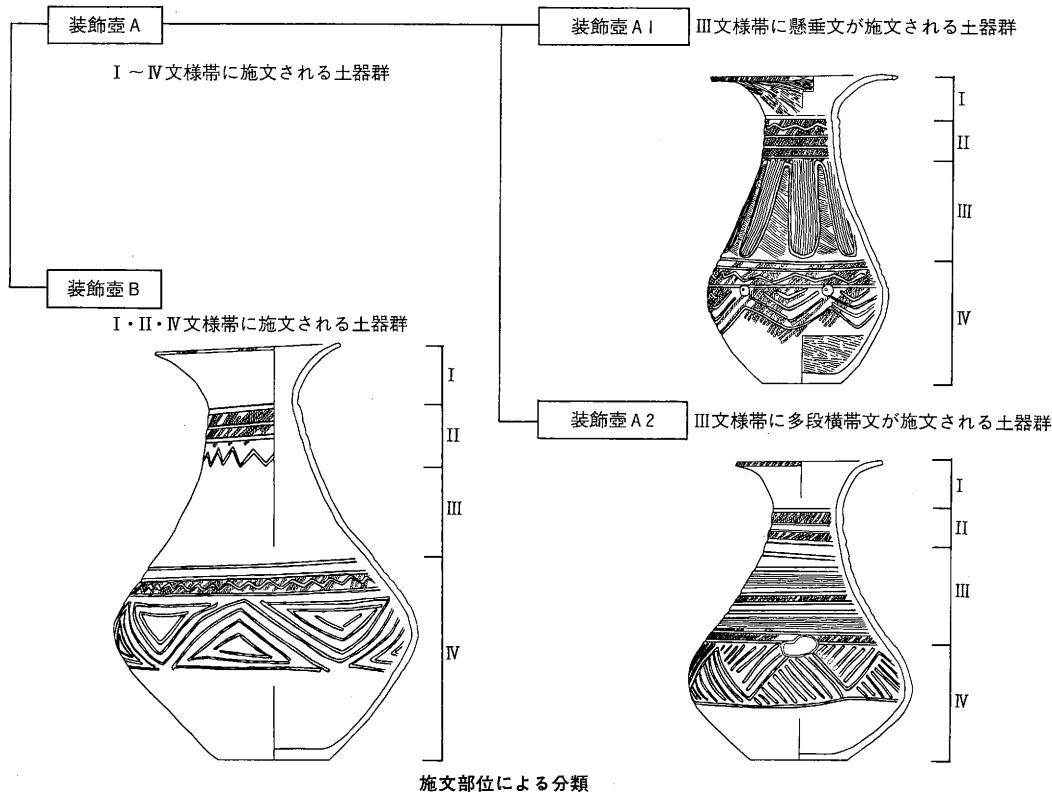


第1図 栗林式土器壺形土器

II 装飾壺の分類と文様

装飾壺の分類

栗林式土器一般について言えることだが、松原遺跡出土の装飾壺は、文様が施文される部位によって2分類される（第2図上）。



第2図 装飾壺の分類

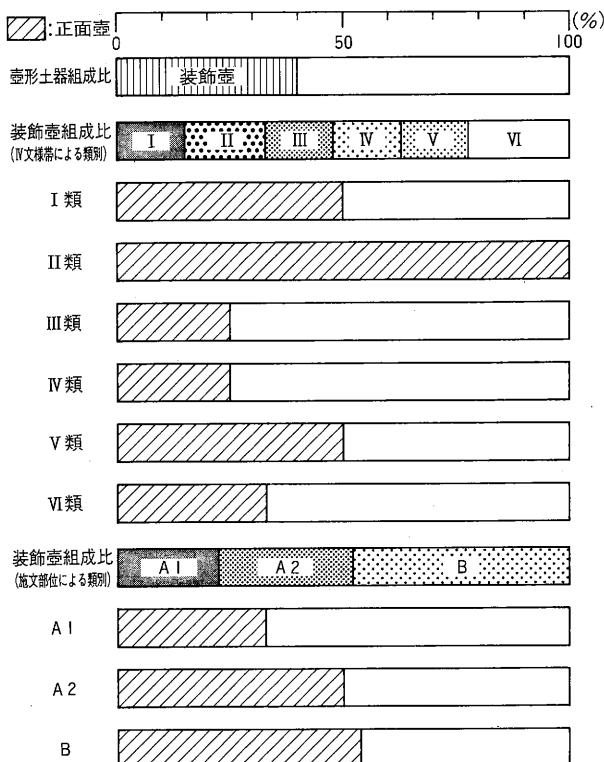
一方、装飾壺たる由縁ともなる胴部文様帯の文様モチーフに着目すると、6分類が可能である（第2図下）。施文部位による分類と文様モチーフによる分類については、両者の相関関係が認められず、ここでは後者の分類を主と見て、前者を細分項目として捉えておきたい。もちろん、この分類で栗林式期の装飾壺をすべてカバーしたとは思えないし、今後さらに細別が加えられたり、あるいは、細別自体が無意味化する可能性も考えられる。特に今回資料として取り扱った松原遺跡の装飾壺にしても、全体量からすれば僅かの数値にしかならず、今後、他遺跡資料などを加えて再検討の必要が生じることと考える。また、施文部位による分類の方が、栗林式土器を研究していく上で、より有効な手段として選択されることも十分予想される。したがって、今回の分類は、一通過点の作業仮説として提示しておきたい。

装飾壺の文様

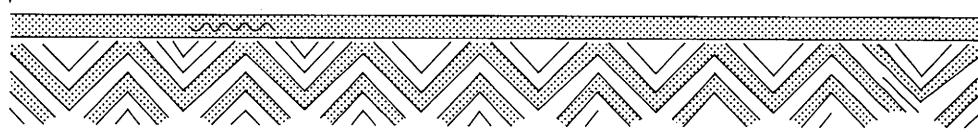
弥生時代の文様は、一つの文様帯の中で、同一の文様モチーフを繰り返すことによって構成されている場合が多いと言えよう。しかし、松原遺跡出土の栗林式土器を観察すると、IV（胴部）文様帯では同一文様モチーフの繰り返しの中に、部分的に微妙な点で異なったモチーフを持つ土器が散見された。試みに文様の全体像がつかめる栗林式の装飾壺を、器形復元されたものを含めて観察したところ、現段階で、27個体中13個体の土器に同様な現象が読み取れた（第1表）。それらの中から幾つかを、模式図で表すと第4図のようになる。また、同じことは、煮沸形態の甕形土器にも僅かながら確認することができた（第7図）。

No	遺物No	大別	細別	器高、法量	正面	手法
1	S B245 - 1	V	B	(31) 大	○	a
2	S B260 - 1	V	A 2	39 大	○	b
3	S B312 - 1	I	A 1	(17) 大	○	b
4	S B1102 - 1	VI	B	(32) 大	○	b
5	S B1134 - 1	I	B	36 大	×	-
6	S B1144 - 1	VI	A 2	(17) 小	○	b
7	S B1146 - 1	II	B	32 大	○	a
8	S B1146 - 2	III	B	28 大	×	-
9	S B1146 - 3	III	A 2	42 大	×	-
10	S B1146 - 4	III	A 2	27 大	×	-
11	S B1146 - 5	II	B	37 大	○	a
12	S B1146 - 6	II	A 1	(17.5) 大	○	a
13	S B1146 - 7	II	B	38 大	○	a
14	S B1146 - 8	I	A 1	28 大	×	-
15	S B1146 - 9	II	A 2	28 大	○	a
16	S B1178 - 1	IV	B	(25) 大	×	-
17	S K156 - 1	I	B	(30) 大	○	b
18	S K156 - 2	V	A 1	(19) 大	×	-
19	S K156 - 3	V	A 2	14.5 小	×	-
20	S K156 - 4	IV	A 2	(44) 大	○	a
21	S K158 - 1	VI	B	(16) 小	×	-
22	S K163 - 1	IV	A 2	(18.5) 小	×	-
23	S K191 - 1	III	B	39 大	○	a
24	S D18 - 1	VI	B	(32) 大	×	-
25	S D18 - 2	VI	B	17 小	×	-
26	遺構外-1	VI	A 1	(10) 小	×	-
27	遺構外-2	IV	A 1	30 大	×	-

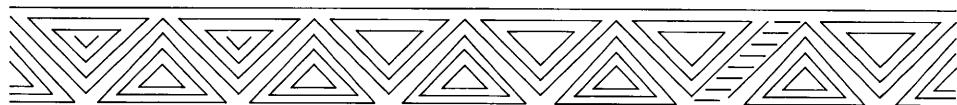
第1表 装飾壺一覧表



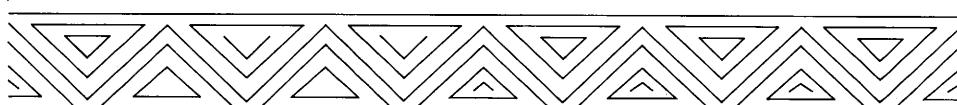
第3図 正面觀を有する装飾壺の比率



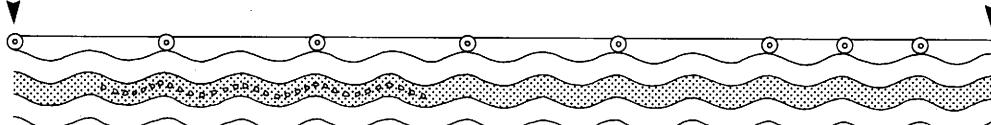
17. S K 156-1 波状沈線付加, 山形文付加



7. S B 1146-1 山形文付加



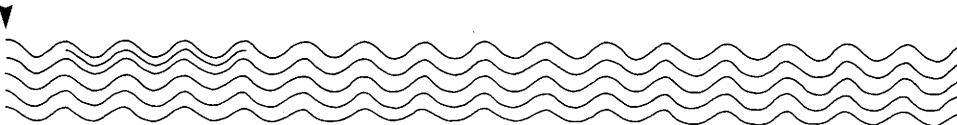
12. S B 1146-6 三角文→山形文, 山形文欠除



2. S B 260-1 連続刺突文付加



20. S K 156-4 円弧文欠除



1. S B 245-1 波状沈線付加

※No.は第Ⅰ表に準ずる

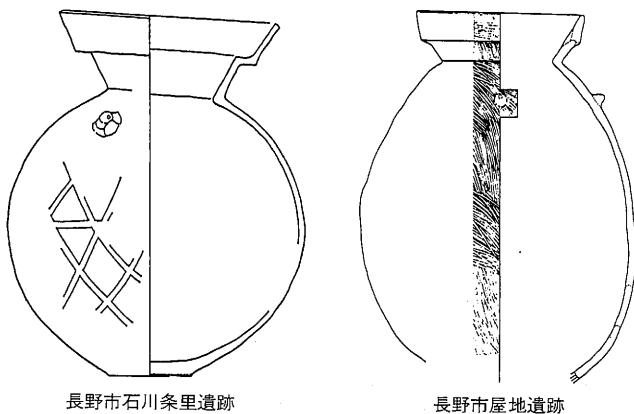
第4図 IV (胴部) 文様帯文様模式図

これらの土器の文様モチーフの変化は、いずれもある一定方向からの視線で確認される。したがって、このような文様モチーフの変化は土器の正面を表現していると言えまいか。こうした土器は、すでに縄文時代前期後半や中期中葉の土器に顕著に認められており、縄文時代研究の中では土器の正面観として捉えられている〔谷井 1979、鈴木 1983他〕。また、あまり注目されていないようだが古墳時代においても、その存在が知られている（第5図）。弥生時代においても、確実に正面を有する土器として、人面付土器が知られている。松原遺跡では、この人面付土器が出土しており〔上田 1991〕今回取り上げた資料とは機能・性格といった点で、基本的に異なるものの、容器を置く時の容器の向き・容器を見る方向という観念が、少なくとも松原集落を構成した集団内には存在していたことが想起される。本稿では、このような文様モチーフの変化を有する土器群を、正面観を表現した土器群として注目しておきたい。

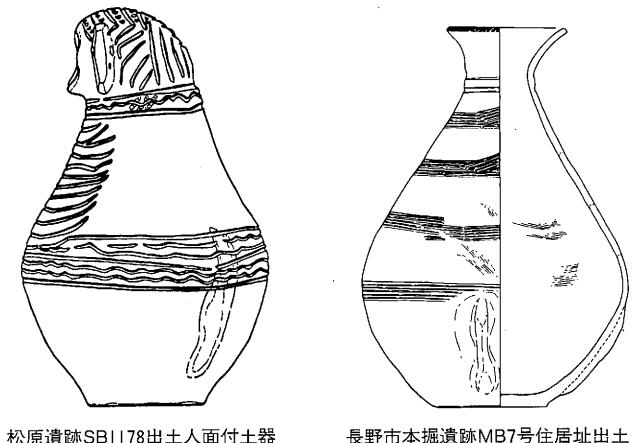
一方、文様モチーフの変化ではなく、器面に縦方向の隆起帯を有する壺形土器が松原遺跡でも出土している他、長野市浅川扇状地遺跡群本掘遺跡などでも出土例が報告されている（第6図右）。こうした資料も、正面観を表現した可能性が予測されるが、松原遺跡例で言えば、先に挙げた人面付土器では側面よりやや後方に隆起帯が認められており（第6図左）、必ずしも正面を表現しているとは限らないと考えられるので、今回の対象資料からは除外した。

III 正面観を表現した装飾壺の存在意義

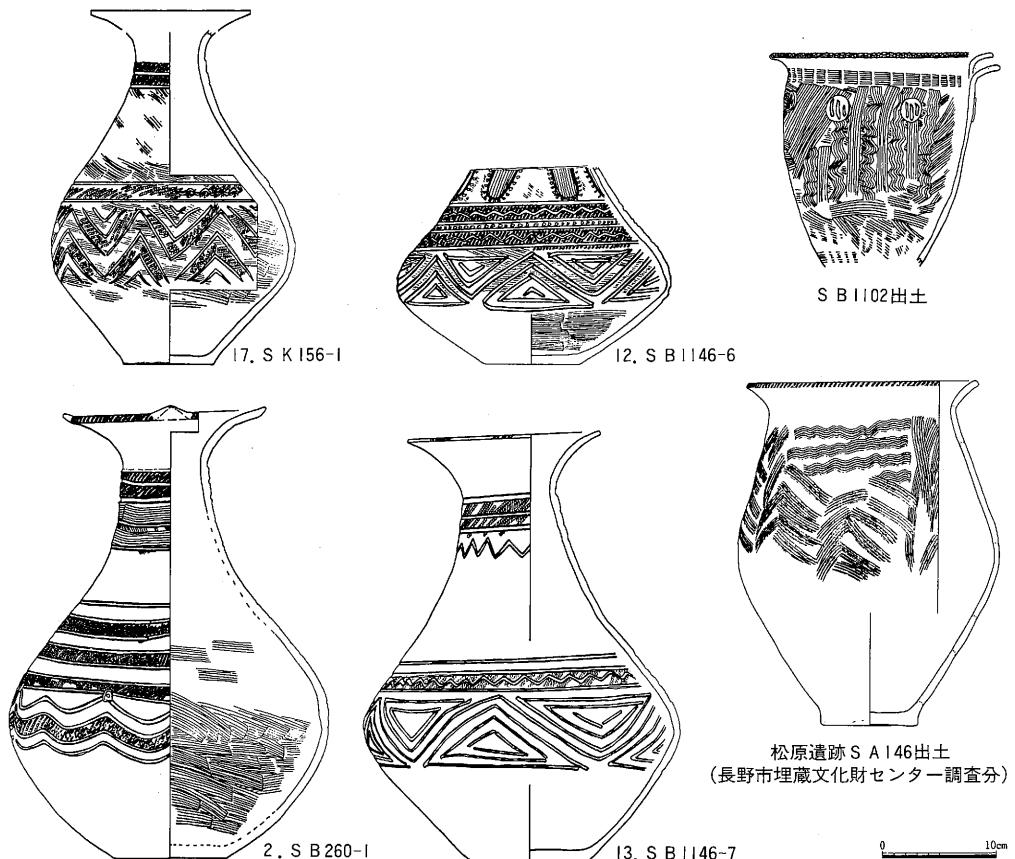
正面観を表す方法として、文様構成の中でさりげなく変化を与えるもの（a手法）と新たに他の文様要素を付加するもの（b手法）の二者がある（第1表、第4、7図）。いずれも、土



第5図 古墳時代の正面観を有する土器（縮尺不同）



第6図 陸起帯を有する壺形土器（縮尺不同）



第7図 正面観を有する装飾壺、甕形土器

器製作段階に施されたもので、使用の結果、あるいは目的に応じて二次的に加えられたものではない。土器の製作者と使用者がほぼイコールで結ばれる時代において、正面表現が、製作者のメッセージを表しているものか、使用者側の要求によるものかは判然としない。ただ言えることは、特定の文様モチーフを持つ特定の法量の装飾壺に、正面表現が限定されるというわけではない、ということである。これは裏を返せば、同一時期に、同一器形に文様を施すにあたって複数のパターンを持ち、かつ、法量の規制をも越えているという、栗林式土器の特徴と合致している。正面観を表現した装飾壺が、先に分類した各類型の中で、数値的にどれだけの位置を占めるかを表したもののが第3図である。

こうした特徴を持つ栗林式土器において、各類型の中でもそれぞれ確固たる位置を占める正面観を表現した装飾壺の存在意義は、注目に値する。容器を置く時の容器の向き・容器を見る方向という観念が日常雑器にも反映し、正面観を意識した装飾壺については、類型の差異を越えた特有の機能が持たされていた可能性も考えられよう。類型の差異が何に起因するのか、機能論の中で解決されていない現状において、論議するテーブルは無いに等しい。敢えて言うならば、貯蔵物の内容、使用者、使用する場面・方法などといった問題に焦点が絞られてくるだろう。これらは考古学的なデーターからアプローチするには限界があり、総合的な判断の中か

ら答を得ることとなるだろう。また、縄文時代以来、弥生時代、古墳時代を通して存在する正面觀を表現した土器は、特有の役割を果たしてきたことは確実で、それが、土器の製作者側と使用者側とに明確に区分される古代において皆無に等しくなってしまう点も興味深い事象である。

何ゆえ栗林式期では、異なった文様モチーフを施した同一規格の容器を、同時時に使用していたのか。土器の諸属性からそれを導き出すことは、極めて難しい。しかし、今回の松原遺跡の資料観察から、装飾壺の場合、文様を含めた土器の完成度と各類型との相関関係に、一つの示唆的な方向が見出せた。文様そのもの、文様の割り付け、器形、器面調整などが、類型によって異なっており、I類が最も整然と製作されている。次いでII類、III類、IV・V類という順で、文様の割り付け、描写方法、器面調整などの水準が劣っていく。その際、III（体部）文様帶の文様の有無は大きく関与していない点にも注意しておきたい。なお余談ではあるが、こうした土器の完成度の相違は、製作者の習熟度の相違を反映しており、作り手に等級のようなものがあって、重山形文を用いることができる作者は上級者に限られていたのでは、などと想像力を掻き立てられる。いずれにせよ、これも扱った資料数が少ないため信憑性は不確かであると言わざるを得ないが、こうしたミクロな視点からの資料提示・集成が、今後の課題の一つと言えよう。もちろん時間的な先後関係や系統性も考慮にいれる必要があり、加えて、同一器種内における文様モチーフの組成比率や一括遺物内での組成率、集落内における住居址別出現頻度、土器の展開図、胎土分析など課題は山積しており、今後の資料分析にその成果を委ねねばならない。栗林式土器の編年的位置付けや細分案が固まりつつある現状において〔千野 1986、小山 1990、寺島 1993〕、こうした視点からのアプローチによる土器論の肉付けが、そろそろ必要ではなかろうか。

IV おわりに

正面觀を有する装飾壺については、文様構成が読み取れる完形に近い個体でなければ、対象資料となり得ないという資料的な制約がある。従来からの資料は、そうした条件に恵まれておらず、今回のような視点が明示されなかった状況にある。それに対し、松原遺跡は土器の完形率が高いという、遺跡の特質が指摘でき、実際に、集計し終えた時点から、僅かづつではあるが確実に正面觀を有する装飾壺の資料数も増加している。加えて、無文の壺形土器に1か所だけ文様を施すという資料も確認されている。遺跡の特性を認識し、今後、対象資料の拡大化と共に、他遺跡の状況にも目を向け、再度、検討を試みたい。

また、文様帶についても、今回は大雑把に器形を当て区分をしてしまった。しかし、正面觀を有する装飾壺の検討を通して、横帶文の単位、懸垂文の意義付け、施文順序、施文技法等、詳細に検討していく必要性を再認識し、それは、やがて頸部文様帶に収斂していくという時代の流れを見据える指針となることが、今更ながら理解し得た。特にIII（体部）文様帶の文様については、複数の同じ内容の単位を重ねることで多段横帶文が構成されるのに対して、懸垂文が施文されるものについては、文様帶、もしくは単位の促え方が微妙で、懸垂文の上下の文様

についても注意を払わなければならないと言えよう。施文域（部位）と単位文様について、特に現象と解釈という部分で、再度検討する必要がある。いずれにしても、いわば未開拓の分野に足を踏み入れた段階で、今後の課題は山積しており、先学諸氏のご批判・ご教授を仰ぎたいところである。

松原遺跡担当班では、本年度の研修テーマを「栗林式土器」とし、自らの学習と共に、各機関から講師をお招きし、有意義なご指導と講演を賜った。本稿は、そうした中で、大いに触発された所産である。小山岳夫、若狭徹、岡本孝之の各氏に、心から謝意を表するものであります。また、松原遺跡担当班の青木一男氏とは、日頃から、栗林式土器研究をめぐって議論する機会があり、図版作成等雑多な部分についても協力を得た。記して、謝意を申し上げます。

参考文献

- ウ 上田 典男 1991 「長野市松原遺跡出土の人面付土器について」
『長野県考古学会誌』 63
- コ 小山 岳夫 1990 「地域編年の再検討」 『信濃』 42-10
- ス 鈴木 敏昭 1983 「縄文土器の施文構造に関する一考察」 『信濃』 35-4
- タ 谷井 彪 1979 「縄文土器の単位とその意味（上・下）」 『古代文化』 31-2, 3
- チ 千野 浩 1986 「北信濃における中期後半の様相」 『第7回三県シンポジウム東日本における中期後半の弥生土器』
- 千野 浩 他 1992 「浅川扇状地遺跡群 二ツ宮遺跡・本掘遺跡・柳田遺跡・稻添遺跡」
長野市教育委員会
- テ 寺島 孝典他 1993 「松原遺跡III」 長野市教育委員会
- ミ 三上 徹也 1989 「長野県長野市石川条里遺跡」 『日本考古学年報』 41
- ヤ 矢口 忠良他 1990 「屋地遺跡II」 長野市教育委員会